

ける土壌微生物の増加および多様化が考えられる。しかしながら、イネ科作物の根圏の生態、バクテリアの種類や個体数とそれらが根圏の物質循環において果たしている機能は、全くといってよいほど研究されていない。SRI 農法には解明すべき農学上の問題が数多くあり、伝統と蓄積のある日本の稲学に期待するところが大きい。

(文責 水野正己)

特別研究会報告要旨 (2003 年 9 月 5 日)

農業研修にみる現代青壮年の諸相

相川 良彦
足立恭一郎

近年、農業体験研修施設が各地に開設され、都市と農村との交流の受け皿になっている。施設の運営方法には幾つかの類型があり、研修生の性格にも差異がある。その代表事例である酪農の北海道新得町、大規模野菜の北海道富良野市、有機農業の山形県高畠町にある 3 施設の研修生を対象にアンケート意識調査を実施した。

本報告の目的は、第 1 に研修生の性格を分析し、現代青壮年のライフスタイルの変容を明らかにすること、第 2 に意識調査における方向性のあるカテゴリカルデータの分析方法として、一対比較法の簡便法の工夫とコレスポネンデンス分析の適用を試みることにある。

施設運営に関して、①新得の場合、町直営方式で研修期間 1 年。研修生は寮（個室）から酪農家へ実習に通い、日当 3000 円を貰い、食費込み月 40,000 円の寮費を支払う。②富良野の場合、公設（市）民営（JA）方式で研修期間 1～7 カ月。研修生は寮（個室）から農家へ通い、主に野菜収穫の作業をして時給 800 円を貰い、食費込み日 1,500 円の寮費を支払う。③高畠の場合、民間団体主導で研修期間は 1 週間余り。研修生は施設と農家に半々ずつ宿泊して、講義の受講と有機農業の作業

体験をする。日当はなく、研修費 35,000 円を支払う。

3 施設研修生の性格では、新得と富良野は 20 歳代で高卒および短大・専門学校、高畠は 35 歳以上で大卒者が多い。研修前の職業では、新得が会社員、富良野がフリーター、高畠が会社員と学生が多い。そして、研修修了後の現住地は新得では町内 48 %、北海道内 31 % なのに対し、高畠では町内 6 % にすぎなかった（富良野は現役研修生調査なので非該当）。

一対比較簡便法により算出した「上位率」を尺度として、研修生の意識を 3 施設間比較すると、①体験研修への参加動機のベスト 2 は、新得が「自然への憧れ」「農業に魅力」、富良野が「自然への憧れ」「親・都会から脱出」、高畠が「食物を自分で作る」「農村生活への憧れ」であった。新得、富良野では自然への憧れが共通だが、新得では農業志向、富良野では脱都会志向が特異なこと、そして高畠では田舎暮らし志向の強いことがわかる。②研修の良かった点では、3 施設とも「同期生と仲良くなれた」など人間関係を重視する。③農業観に関して、農業が環境保全に役立つという認識は 3 施設共通だが、高収益を獲得できるか否かは新得・富良野と高畠では賛否が別れた。④研修後の意識の変化では、「相談仲間が出来た」「農業・地域への愛着強まる」は共通だが、「ハードな労働に耐える自信」が富良野特有の変化だった。⑤修了後の仕事と居住地では、新得が農業就業・当地居住を、富良野が農外就職・帰郷を、そして高畠が農業就業・帰郷を、それぞれ希望していた。

コレスポネンデンス分析は、サンプル（3 施設）とカテゴリー（設問）相互の距離（重み付きユークリッド距離）を計測し、それぞれ X-Y 平面にプロットして関連性の粗密の程度を観察しようとするものである。数量化Ⅲ類に似た多変量解析手法であり、マーケティング分析において消費者の商品イメージの把握に適用されることが多い。農業経済分野では適用事例は少ないが、アンケート意識調査に適用した結果は一対比較簡便法による上記の観測を支持するものであった。